鳥取環境大学紀要
第 3 号（2005.2）pp.111 －117

Front と *Before* について
空間から時間への意味の拡張を中心に

On *Front* and *Before* — The Meaning Extension from Spatial to Temporal Expressions

楢和　千春

NARAWA Chiharu

和文要旨：人間は自らの身体のかたちを利用して空間を分割し、認識している。そして、感覚器官が集中する面であり、視線の向きであり、運動の方向である「まえ」を別のものに投影することによって、ものとものとの位置関係を述べる。このことは、時間という抽象概念の理解にも大きな役割を果たしている。英語では「まえ」という方向は *in front of* や *before* を用いて指示される。どちらも語源は空間的意味であるが、前者は空間表現にのみ用いられ、後者は主に時間表現に用いられている。本稿は空間表現で両語が指示する「まえ」を考察し、*in front of* の空間表現から時間表現への意味の拡張に制限がある理由を述べた。
【キーワード】言語、認識、空間、時間、方向づけ

Abstract ： Humans use the body as a reference point to specify space. Most sensory organs are on the ventral side of the body, and the space in front of humans is what they perceive and interact with. Therefore, the concept of *front* has a special meaning for them. The concept is used to locate objects in space and also to conceptualize *time* in the use of the words, *in front of* and *before*. However, while *in front of* is used only in spatial expressions, *before* is mainly used in temporal expressions. This study examines, through the usage of the words, how humans project *front* to objects in space, and it gives a reason why the use of *in front of* is limited to spatial expressions.
【Keywords】language, cognition, space, time, orientation

１．人間の空間認識とことば

１－１　身体と空間認識

人間は直立している自分の体の中心を通る垂直な軸と体の面を基準にして空間を分割する。視覚を始め感覚器官の集中する体の面とそれに接する空間を「まえ」として、その逆を「うしろ」として認識する。「まえ」と「うしろ」は、体の中心を通る前後の軸によって分割される「左」と「右」と共に人間が空間を記述するための参照枠を構成する。人間の活動は２つの基本的な経験を伴う。すなわち、水平な地面に垂直に立っているという経験、そして、別の人間と向かい合っているという経験である。これらの経験に基づいて人間は空間を記述する [1)]。これらの空間に関する概念の中で「まえ」は人間の視界であり、歩いて進んでいく空間・方向であるから、人間にとって特別に重要な意味を持つ。

人間はさらに「まえ」を自分以外のものにも投影し、空間に存在するさまざまなものとものとの関係を認識する。ものには本来、客観的な「まえ」は存在しない。人間が自分の体の半分とそれに接する空間をことばによって概念化し、その概念を自分以外のものに投影することによって、空間においてあるものが他のものの「まえ」にあることを認識することが可能となる。もし、ことばによる概念化がなければ、眼前には色とりどりのイメージの混沌と茫漠たる空間が広がるばかりだろう。人間はことばによって空間を分節し、認識しているといえる。

「まえ」は人間の視界であり、歩いて進んでいく空間

であるから「うしろ」とは非対称の価値をもつ。人間の体の左右が対称的であり、特に方向性を認識されないのに比べ、この非対称性は「うしろ」から「まえ」あるいは「まえ」から「うしろ」への方向認識の源となる。「まえ」は人間の歩行という運動性とつながっているため、動くものが進んでいく方向は「まえ」であると認識される。この「まえ」の持つ方向性ゆえに、「まえ」は人間の比喩的な時間認識にも関わる。人間の身体構造とそれに由来する制約が時間という抽象概念の理解に大きな役割を果たしている。

１－２　概念としての「まえ」と言語表現

まず、区別しておきたいことは、概念としての「まえ」と言語表現との違いである。「まえ」という概念をそのままことばで表そうとするならば、マエと表記するしかない[2)]。しかし、「まえ」という概念は必ずしもマエという語だけに含まれるわけではない。たとえば、日本語ではサキ[3)]や進行動詞、英語では front, before 以外に forward や ahead, advance, 時間の前後関係では prior, previous などがある。また「まえ」は言語において接辞や語といった形態にのみ反映されるとも限らない。「まえ」が人間の時間認識にも関わっているため、時制やアスペクトなどの文法形式にも反映されると考えられるが、本稿では語のレベルに限定する。

空間と時間の意味領域において、「まえ」という概念は、日本語ではどちらの意味領域においてもマエという語で主に表現される。英語では front, before という２つの語で表現されるが、front が空間表現に限定され、時間表現では用いられないのに対し, before は時間表現だけではなく、形式的なまたは古めかしい使い方とされてはいるが[4)]、空間表現でも用いられる。双方とも空間表現では「まえ」という概念を表しながら、なぜ、before だけが時間表現で用いられるのだろうか。

本稿の目的は人間にとって重要な価値を持つ概念である「まえ」が front と before においてどのように表現されるかを考察することにより、２つの語における「まえ」の認識の共通性と差異を記述し、２つの語がゆるやかにその意味領域を重ねあわせながらも、空間と時間という別の領域にそれぞれの使用の分布がわかれる理由を示すことである。

２．空間表現―面と方向

２－１　もののかたちや機能に依存する「まえ」

front の語源はラテン語の *frons frontis* で、主な意味は人間の額や冠などを被る頭の部分、動物の角が生えている部分、ものの先端の面、ものの表面、四角い物体の幅の広い面、前方に、マエになどである[5)]。したがって front はものの面とそれが指し示す方向を意味している。

(1)　spill coffee down the front of one's shirt[6)]
　　コーヒーをシャツのマエの部分[7)]にこぼす

上の例で front は人間の体の感覚器官が集中する面およびそれに接する場所を意味する。この場合、「まえ」は人間の身体構造によって内在的に規定されている。

人間は自らの身体の「まえ」を概念化し、他のものにも投影する。ものには本来「まえ」はない。人間が「まえ」という概念を投影する面がものの「まえ」となる。人間が何に「まえ」を投影するか、すなわち、何を「まえ」であると認識するかには、いくつかの要因が考えられる。まず、人間の身体構造のように「まえ」であると認識されやすい面がもののかたちに内在する場合。生物であれば、人間と同様に感覚器官がある面が「まえ」であると認識される。無生物であれば、人間が自らの身体的特徴である、体の前部の左右対称性を投影できる面、上で挙げた front の語源でいえば、四角い物体の幅が広い面などである。また、人間が通常それを使用するために近づいていく面や視界に入る面は「まえ」であると認識されやすい[8)]。何が「まえ」と認識されるかは、もののかたちや機能に依存し、人間とものとの相互作用の過程で決まる。

(2)　the front of a church
　　教会の正[前]面

教会建築の正面は左右対称であることが多く、また、建物に入るために近づいたり、その際、当然視界に入る面が front であると認識される。言語使用者の現実の視点がどこにあっても、かたちや機能によって認識される「まえ」は変わらない。たとえば、言語使用者が教会を横から見る位置にいたとしても、「教会の正[前]面」は常に一定である。

一方、before の語源は、OE *beforan* (BE+*foran* adv. F. OTeut. *fora* FOR) であり、be fore すなわち、Be 動詞が既に含まれている。fore は名詞として「前部」、「前面」、形容詞、副詞として「前部の[に]」、「前方の[に]」を意味する。単独で使用されるよりはむしろ複合語を構成する要素となっている。front がものの前面を意味することができるのに対し、before はすでに Be 動詞を含み、「前方にある」という意味であるから、ものの前面自体を意味し

ない。この点で front とは異なる。

(3)　He stood in front of the church
　　彼は教会の正面に立った

(4)　He stood before the church
　　彼は教会のマエに立った

(3)では front は前置詞を伴って in front of という形式でものの位置方向を示す。この場合、front は「教会」の正[前]面を基準にして「彼」のいる位置方向を示している。(4)はほとんど(3)と同じ事態を意味しているが、before は(3)の front に比べ、ものの面への関与が弱く、むしろ「彼」の位置方向を強く示していると思われる。

２－２　視点や視線の方向に依存する「まえ」

もののかたちや機能に依存しないで認識される「まえ」もある。

(5)　? The front of a ball
　　?ボールの正[前]面

(5)では球形のものはどちらの面から見ても同じであり、どの面を使用してもかまわない。したがって特に「まえ」であると認識される面がない。ただし、球形であっても非常に大きく、空間の位置関係を述べるための顕著な目印となるものには in front of を用いることができる。

(6)　He stood in front of the sphere
　　彼は球体の正面に立った

同様に木にも「まえ」はない。しかし、つぎのような表現は可能である。

(7)　There is a cat in front of the tree
　　木の正面に猫がいる

人間はしばしば空間においてあるものを基準として方向を定め、その方向に関連づけて別のものの位置を述べる。東西南北や緯度、経度といった絶対的な基準によって位置を述べるのではない、相対的な記述方法である。基準となるものはランドマーク (LM) と呼ばれ、それを基準として位置を記述されるものはトラジェクター (TR) と呼ばれる。TR は人間が何かを認知する際、その注意を際立って惹くもの、認知の焦点となるものであり、LM は認知の焦点とはならない背景的要素のことである[9]。このような空間における位置関係の記述には、言語使用者の現実あるいは仮想の視点が含まれる。(7)では言語使用者は木(LM)に対面していて、木が自分に向けている面に「まえ」を投影して猫(TR)の位置を述べている。木にはかたちからも機能からも「まえ」と認識される面はないが、人間は他人と対面するという人間の活動における基本的な経験に基づいて、木にも同様に対面状況を投影して「まえ」を認識する。そして、LM に投影した「まえ」の示す方向によって TR の位置を述べる。英語では前置詞を用いて空間の位置関係を述べるが、それが指示する方向には言語使用者の方向認識が投影されている。in front of も before もこのような投影的前置詞である[10]。(7)では言語使用者の現実あるいは仮想の視点と LM と TR が直線上に並んでいる。

直線上に並んだ LM と TR の向きについて Tyler and Evance (2003)は、LM と TR が対面している鏡像的な並び方 (mirror-image alignment) と、LM と TR が同方向を向いている並び方 (in-tandem alignment) とを挙げ、in front of はいずれの状況でも使用されるので、LM は「まえ」という方向性を持つが、TR 自体の向きは関与しないとしている[11]。

(8)　The teacher stood in front of the class as he explained the day's lesson[12]
　　教師は学級の生徒の正面に立って、その日の学習内容を説明した

(9)　The teacher was difficult to hear when he was in front of the class because he often spoke as he wrote on the blackboard[13]
　　その教師は学級の生徒の正面に立っているときは聞き取りづらかった、というのも、黒板に書きながら話すことがよくあったからだ

(8), (9) は LM と TR が鏡像的に並んでいる例、同方向を向いて並んでいる例を示す。TR である教師の向きには関係なく、in front of は LM である学級の生徒の「まえ」という方向性を示す。

しかし、これらの例は LM のかたちや機能に依存して「まえ」が決定されている。鏡像的な並び方は LM と TR の間においてよりは、むしろ、(6), (7) の例のように LM のかたちや機能で決定される「まえ」がない場合における言語使用者の視点と LM の位置関係において大きな役割を果たすと思われる。言語使用者が自らと LM に鏡像的な並び方を投影することなくして、in front of を用いる

ことができないからである。

２－３　順序と方向認識

in front of の使用において TR の向きは関与しないとは言っても、ある状況においては LM と TR が同方向に並んでいると解釈される場合がある。

(10) Come [Go] to the front of the class
教室の最前列の席に来なさい[行きなさい][14]

ここでは TR は「最前列の席」であり、LM は TR もその一部である教室の座席の列である。教室では典型的には座席が黒板のある方向、教師のいる方向に向いて列をなしているという言語外の知識に基づいて座席の列の向きが教室の「まえ」を指示している。

では言語外の知識に依存することができない、つぎの例ではどうか。

(11) Stand at the front of the line
列の最前列に立つ

ここでは front は面という概念を薄れさせつつ、直線上の「まえ」方向の最先端にあるという位置を意味している。一方、before にはものの一部としての意味がないので、列の一部を構成して最前列に立つという意味では用いることができない。しかしつぎの例のように列の中でものの順序を述べるときは、before も front も用いることができる。front は前置詞を伴って in front of という形式で用いられる。

(12) Betty is [in front of /before] Bob in line waiting for a security check
セキュリティチェックを待つ列の中でベティはボブのマエに並んでいる

(11), (12) のような表現が可能であるのは列に「まえ」という方向が認識されているからである。列とはものがある間隔をおいて直線上に並んでいることであり、本来客観的には方向がない。人間は列の構成物のかたちや機能または目的に基づいて、列に「まえ」を投影する。(12) では「まえ」の投影にあたって、列の構成物である人間の向きではなく、列の目的が優先されている。そして、in front of も before も列に投影された「まえ」に向かって、列の中での LM と TR の位置関係、すなわち順序を述べている。

３．空間から時間へと拡張する意味

３－１　時間軸上に列をなす出来事と方向

(10)−(12) の例では具体的事物が並んでいる列における方向性と順序が front と before によって示されていたのだが、列を構成している事物が具象性を失い、抽象的概念となった場合はどうなのだろうか。何かが「列をなしている」と認識されるためには、列の構成物が別個の独立した存在でありながら、あるレベルで同じ属性を共有している、すなわち、同じカテゴリーに属していると認識されることが必要である。(10)−(12) の例では列に並んでいるのは「生物」であり、同一のカテゴリーに属する個々の事物の具体的な特徴、すなわち、彼らのかたちに内在するとみなされる向きや列の機能または目的によって「まえ」という方向が認識された。しかし、抽象概念が「列をなしている」場合、列の構成要素にかたちに内在するとみなされる「まえ」があるわけではなく、「列」自体が方向性を持つわけでもない。時間表現はまさにその一例である。しかし、つぎの例が示すように、時間軸は方向を持つ。

(13) We arrived before two o’clock
私たちは２時マエに着いた

(14) Stock prices climbed close to the peak they’d registered before the stock market crashed[15]
市場が暴落するマエに株価は過去につけた最高値ちかくまで上昇した。

(15) The quarrel of the night before seemed forgotten[16]
前夜のけんかは忘れさられたようだ

before は前置詞、接続詞、副詞として、ある出来事がある時点より時間的に早く起きたことを意味している。すなわち、before は時間軸上で過去を「まえ」に方向づけて、時点や出来事を順序づけている。なぜ、過去が「まえ」なのか。そして英語の時間表現では before は用いられるが in front of は用いられない。空間の列におけるものの順序を述べるためにはどちらの語も用いられるのに、なぜ、時間表現では before しか用いることができないのか。

３－２　運動と方向性

以下の例では何が「まえ」を投影させるのだろうか。

(16) John stood in front of the oncoming train
ジョンは向かってくる列車の[正面・マエ]に立った

列車のかたちは特に方向性を持たないが、列車の進行方向に「まえ」が投影されている。

(17) On the conveyer-belt that moves bottles to the washing machine, smaller bottles are always placed in front of larger bottles[17)]
ビンを洗浄機へと運ぶベルトコンベアの上では小さいビンが常に大きいビンのマエに並べられる

ビンにはかたちや機能に基づいて投影される「まえ」がないのに、なぜ、小さいビンは大きいビンの「まえ」にあると認識されるのだろうか。この例ではビンの列はコンベアベルトに乗って一定の方向へと移動している。その運動の方向に「まえ」が投影されている。ものの運動は「まえ」の投影に密接な関わりを持つ。

運動に関連して、in front of の興味深い用例がある。先にも述べたが、in front of は主に空間における位置関係の記述に用いられ、順序や時間の前後関係を述べるときは before が用いられるとされている。しかし、つぎの例では in front of が順序を表している。

(18) You use *a* or *an* in front of the names of artists to refer to one individual painting or sculpture created by them[18)]
芸術家の名前のマエに a あるいは an を用いると、彼らによって創作された個々の絵画あるいは彫刻を意味する

この例では文中の語の並びについて、ある語の「まえ」に不定冠詞を用いるという語順について述べている。語は二次元の紙の上に線状に並んでいる。紙は三次元の奥行きを持たないので、この場合の front は通常の空間表現で方向を指し示す基準となる「面」の意味を限りなく薄れさせているが、それでも尚、in front of は文中での語の順序を「まえ」で示している。なぜ、それが可能なのか。英語では文字は左から右に読まれていくという視線の動きがあるからではないだろうか。視線そのものの動きの方向ではなく、時間的により早く視界に入って、プロセシングされる順序に「まえ」が付与される。視線の動きとは逆に文は右から左へと動いていくように感知され、その動きの方向に「まえ」が投影されている。

３－３　過ぎ去っていく時間

文が右から左へ動いていくと感じられるように、抽象概念であるにもかかわらず、時間もまた動いていくと感じられている。そして、時間軸上では過去が「まえ」に方向付けられている。時間は過去へ向かって動いていると感じられている。

もし、時間軸に付与される方向性が「左右」だったらどうだろうか。たとえば過去には「まえ」の代わりに「ひだり」が付与されるとしたら。

(19) *We arrived at two o'clock on the left
＊私たちは２時ヒダリに着いた

(20) *Stock prices climbed close to the peak they'd registered when the stock market crashed on the left
＊市場が暴落するヒダリに株価は過去につけた最高値ちかくまで上昇した

(21) *The quarrel of the left night seemed forgotten
＊左夜のけんかは忘れさられたようだ

さきにも述べたように時間軸という抽象概念の列には、構成要素のかたちや列の機能、目的によって付与される方向性はない。もし、時間軸に何らかの方向性を付与するとすれば、言語使用者の視点や運動との関係においてそれが可能となる。「左右」の方向性を投影するのであれば、時間軸は言語使用者の前後の軸と交差していなければならない。その上で何らかの理由で過去が「ひだり」に方向付けられているなら、(19)-(21) の表現は可能であるだろう。実際は、before が過去の方向を示すように「前後」の方向性が投影されていることから、時間軸は言語使用者の前後の軸と平行している。

Koschmieder は事象と時間と認知主体との関係に着目し、つぎのような「時の方向関係」を提案してアスペクトを説明している[19)]。彼は時間軸上における事象と認知主体との相対的関係がアスペクトに表現されるとし、つぎの２つの時間感覚を挙げている。ひとつには時間軸が静止し、認知主体が動くと感じられる場合。認知主体は時間軸上を過去から未来に向かって移動すると感じる。他方は認知主体が静止し、時間軸が動くと感じる場合。事象は時間軸上に貼りついたまま認知主体を貫いて未来から過去に向かって動くように感じられる。これはアスペクトだけでなく、なぜ、時間軸上で過去が「まえ」に方向づけられるかを説明できる。時間は抽象概念であるから、実際に運動が観察されるわけではない。認知主体

が主観的に感じる動きにすぎない。ではその動きの感覚を生み出しているものは何か。認知主体が時間軸上で未来に向かって歩きつづけているという運動の感覚にほかならない。それは同時にあたかも時間が認知主体とは逆の方向に動いていくような感覚を与える。ゆえに時間は右から左へは流れない。時間が動いていくと感じられる方向、すなわち、過去に「まえ」を方向づけることによって出来事の順序は述べられる。

４．まとめ

語源が示すように front は身体やものの部分としての前面とそれが指し示す方向を意味する。したがって、時間表現で in front of を用いることができない理由としては、まず、抽象的で「面」を持たない一次元の線として認識される時間軸上では、in front of が示唆する「面」の意味がその使用を妨げることが考えられる。一方、before は部分としての面の意味を含まない。そのため、時間軸上の出来事と出来事の関係を順序として記述し得るのではないか。

また、例の(6), (7) が示すように、in front of は認知主体が他人と対面するという人間の活動における基本的な経験に基づいて、かたちからも機能や目的からも「まえ」と認識される面がない LM に対し、自らに向けている面に「まえ」を投影するときに用いられる。一方、「面」への関与が低いことから、before はそのような LM の認知主体に対向する方向性についても関与が低いと考えられる。時間軸上では認知主体と未来の出来事との間には対面状況が示唆されても矛盾は生じないが、すでに「過ぎ去った」と感じられる過去の事象については、認知主体はそのような対面状況を想定することができず、in front of の使用に心理的抵抗を感じるのではないかと考えられる。in front of は時間軸上で出来事と出来事との位置関係を述べるためには、あまりに認知主体の視点との関係が強すぎるといえる。

謝辞

before, front のラテン語に遡る語源、及び、Koschmieder のアスペクト論について環境政策学科、山口巖教授にご教示いただいた。Abstract の校閲は同僚の Ms. Bettina Begole にお願いした。お二人に深くお礼申し上げる。

注

1) Clark (1973).
2) ここでは概念としては「まえ」、言語表現としてはマエとカタカナで表記する。漢語の中に含まれている場合は「前」と表記する。
3) サキは細長いものの先端を意味し、人間がその先端を空間における「まえ」、または、時間軸の「まえ」に方向づけることによって、進行方向の空間や、時間軸上の過去を意味すると考えられる。たとえば「サキの大戦」。
4) “ **Before** is sometimes used to mean ‘ in front of ’. This is a formal or old fashioned use. ” *Collins Cobuild English Usage*, p.93.
5) *Oxford Latin Dictionary* によれば、**1. a.** The forehead, brow (of a person), **b.** (as the place where garlands or crowns are worn). **c.** (as the part of branded). **d.** (of animals, esp.as the place where the horns grow)... **5. a.** The foremost side of anything, front (as opp.to back and sides) **b.** *a fronte* in front, to the fore **c.** *ante frontem*+gen. in front of, before. **6.** (mil.) The front of an army or fleet in battle array... **8.** (applied to one or other extremity or face of a thing: **a.** The outer or inner surface (of a wall etc.)... **d.** The broad side (of something rectangular) etc.
6) 『新編英語活用大辞典』、p.1068.
7) 日本語では「部分」という語を加えて、体に接する場所であることを明示しているが、front も体の前面およびそれに接する場所を意味するときは定冠詞 the を伴う。また日本語には「部分」という語を付け加えなくとも体の前面とそれに接する場所を意味する例もある。「ズボンのマエが開いていますよ」
8) Fillmore (1997), Talmy (1983), Tyler and Evance (2003).
9) Langacker (1987).
10) Herskovits (1991).
11) Tyler and Evance, *op. cit.*, pp.156-161.
12) *ibid.,* p.158.
13) *ibid.*
14) 『新編英語活用大辞典』、p.1068.
15) *Collins Cobuild Advanced Learner's English Dictionary,* p.115.
16) *Collins Cobuild English Usage*, p.93.
17) Tyler and Evans, *op. cit.,* p.162
18) *Collins Cobuild Advanced Learner's English Dictionary,* p.1.
19) 山田小枝 (1984), p.23.

参考文献

Clark, Herbert H. (1973) “ Space, Time, Semantics and the Child ” in Timothy E. Moor (ed.) *Cognitive Development and the Acquisition of Language*. Academic Press, 27-63., New York.

Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary. 4th.ed. HarperCollins Publishers., London.

Collins Cobuild English Usage. HarperCollins Publishers., London.

Fillmore, J. Charles. (1997) *Lectures on Deixis*. CSLI Publications., Stanford, CA.

Koschmieder, Erwin. (1935) " Zu den Grundfragen der Aspect-theorie " in Sommer, Ferdinand. et.al. (eds.) *Indogermanische Forschungen* 53, Walter De Gruyter.

Langacker, Ronald.(1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.1. Stanford University Press., Stanford, CA.

Talmy, Leonald. (1983) " How language structures space " in Pick, Herbert. et.al. (eds.), *Spatial Orientation: Theory, Reasearch and Application*., 225-82. Plenum., New York.

The Concise Oxford Dictionary of Current English. 4th. ed.

The Oxford Latin Dictionary. Clarendon Press., Oxford.

Tyler and Evans. (2003) *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge University Press., Cambridge.

Herskovits, Annette 著. 堂下修司（他）訳. (1991) 『空間認知と言語理解』オーム社

市川繁治郎（他）編. (1995)『新編英語活用大辞典』研究社

山田小枝(1984)『アスペクト論』三修社

（2005 年 1 月 26 日受理）